

第59回 ふるさと見て歩き

庚申塚

◆庚申塚と十三塚



▲庚申塚

宿になって、床の間に青面金剛や文字の書かれた掛軸を掛け、夜通し飲食をしながら歓談をしました。青面金剛は庚申信仰の本尊として室町時代以降、石仏、木造仏、掛軸などが作られるようになり、江戸時代には庚申信仰が大流行しました。娯楽の少ない時代にあつては楽しみなイベントだったことでしょう。



▲青面金剛（参考）

山方の「ケビン村」の中に江戸時代の石仏が祀られている小高い塚があるのをご存知でしょうか。中央に庚申塚が二基あり、他に二十三夜塔や如意輪観音など八基が祀られていて、地元ではこの塚を「庚申塚」と呼んでいます。

庚申塚は庚申信仰の対象として建てられました。庚申信仰は、六十日に一度回ってくる庚申の日に、人が寝ている間に体から出て、その人の悪行を天帝に告げ口する三尸の虫が体から出て行かないように寝ずに過ごす行事です。人は悪行を知られると寿命が短くされてしまうと信じられていたため、庚申講を行うことは延命長寿祈願につながるものでした。大抵は講を組織する人が順番に

庚申塚にある庚申塔は安永六年（一七七七）と天明八年（一七八八）のもので、青面金剛の像容ではなく文字を刻んだものです。ところでこの塚、もともとあつた塚を庚申塔を建てるために再利用したものでしょう。

当初は、南皆沢古墳群の一つと考えられていましたが、十三塚の一つである可能性が出てきました。庚申塚から南方向に一列に並んで、高さ一メートルにも満たない小さな塚が確認されます。林の中なので確認は難しいですが、ほぼ等間隔に十個余りの塚らしい形状が残っています。

十三塚とは、民間信仰に基づくといわれる構築物で、中世（十二世紀から十六世紀頃）以降に多く造られ

ました。十三の仏を祀っている、とか十三人の死者を埋めた物、などといわれますが諸説あり、はっきりしたことは分かっていません。



▲十三塚と思われる塚

◆破損した庚申塔の修復

三月十一日の大地震で天明八年の庚申塔が倒壊し、他の石造物は最小限の破損で済んだものの、位置が大きくずれたり転倒したりする被害がありました。



▲倒壊した庚申塔

倒壊した庚申塔は台座から後ろに倒れたため、石碑が二つに割れてしまいました。また、凝灰岩質のもろい石材のため、刻銘のある表面が剥離してしまいました。

剥離した石の破片が失われてしまうことや安全確保の観点から、六月には庚申塚のすべての石造物を元の位置に戻しました。そして七月には割れてしまった庚申塔と二十三夜塔をエポキシ樹脂で接着しました。石材や建物の修繕に活躍するセメントやモルタルは、塩が出て石碑に悪影響を及ぼす可能性があることから、文化財修復には不向きなのです。また、接着面と石碑と間に隙間が空いてしまうと、そこが、割れや剥離の原因となるので、筑波大学大学院の松井敏也准教授のご指導のもと、樹脂に粉碎した岩を混ぜて「擬岩」を作り、充てん作業を行いました。擬岩には通水性があり、割れやすくなることを防ぎます。現在も作業は継続中です。



▲接着・充てん作業の様子

歴史民俗資料館大宮館

52-11450